キズナエピソード

及川依子　4話

//背景：黒

//ヴィジュアルノベル形式開始

あれから、俺と依子は付き合うようになった。

とは言え、依子は恋愛禁止を謳っているアイドルだ。

俺との交際を表沙汰にするわけにはいかない。

だから、依子のライブが終わった後に変装して密会するのが

俺達のお決まりのデートになっていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//ライブ会場・裏手側

［依子］

「あぁ、もうこんな時間。そろそろ戻らないと。

とびお、またね……の前に元気ちょうだい！」

［とびお］

依子が俺を引き寄せて強引にキスをしてくる。

俺は素直に受け入れつつも、

唇を離したあとで慌てて周囲に視線を配った。

［とびお］

「気をつけろって。

誰かに見られてたらどうすんだよ」

［依子］

「大丈夫、大丈夫。

ここは関係者しか来れない場所だし、

マネージャーに人払いも頼んでるから」

［依子］

「だから、もう一回……んちゅ」

//暗転

//ライブ会場・廊下

［依子］

「ふふっ。

よーし、元気も貰ったしがんばるぞー！」

［後輩アイドル］

「見ーちゃった！」

［依子］

「っ！」

［後輩アイドル］

「うっふっふー、イコ先輩、いっけないんだー。

恋愛禁止のアイドルなのに彼氏だなんてー。

どうしよっかなー。私、誰かにしゃべりたいなー」

［依子］

「……はぁ、やかましいなぁ。喋りたければ喋れば？

とびおと付き合うことは、イコが自分で決めたことなの。

私にとっては弱みじゃなく、強みだから」

［依子］

「言いたいことはそれだけ？

それじゃあ、イコは行くね。バイバーイ」

［後輩アイドル］

「ちょ、ちょちょ、ちょっと先輩。待ってくださいよ。

私は後輩ですけど、私のほうが人気があるんですよぉ？

落ち目の人がそんな態度でいいんですかぁ？」

［依子］

「んー。後輩ちゃんはまだこの業界短いだろうから

教えてあげるね。

お金で人気は買えても、品性は買えないよ？」

［依子］

「じゃあね、お疲れ様ー」

//依子退場

［後輩アイドル］

「何よあの女ー！　今に見てろよ……！」

//暗転

//ライブ会場・裏手側

［後輩アイドル］

「こんにちはー！とびおさんですよねっ！」

［とびお］

俺が帰ろうとしたとき、知らない女の子が現れた。

［後輩アイドル］

「私、依子さんの後輩なんですー！

依子先輩にはいつもすっごく良くしてもらっててぇ

とびおさんとおしゃべりしたいなって思ってたんです♪」

［とびお］

「あぁ……そうなんだ。

えっと、依子……さんも近くに来てるの？」

［後輩アイドル］

「まぁまぁ、とびおさん。

せっかく人気アイドルの私がそばにいるんですよぉ？

もっと違う話をしましょうよー」

［とびお］

依子の後輩と名乗る子はグイグイ近づいてくると、

俺の手を握ってきた。

［後輩アイドル］

「うわぁ、とびおさんって、手が大きいー！

ニギニギしてもいいですか？　わっ、腕もすごーい！

抱きついちゃえ！　えいっ、ぎゅ～！」

［とびお］

明らかに彼女は自分の胸を俺の腕に押し付けている。

それとなしに振り払おうとすると、

彼女がじっと瞳を覗き込んできていることに気づいた。

［後輩アイドル］

「とびおさんて、

依子先輩と付き合ってるんですよねぇ？

でもぉ、もったいなくないですかぁ？」

［後輩アイドル］

だって依子先輩って、性格悪いせいで、

最近落ち目じゃないですかぁ。

胸だって無いから、こういうこと出来ないしぃ。」

［後輩アイドル］

「ここだけの話、仕事取るために枕もやってるって噂で

すっごい有名なんですよぉ

とびおさん素敵な人なのに、勿体ないなぁって思ってぇ」

［とびお］

「……」

［後輩アイドル］

「だから、そんな先輩よりもぉ、私と付き合いません？

私、とびおさんみたいな人、すっごくタイプなんです♪」

［とびお］

……何を言ってるんだ、この子は。

俺は、無理やり彼女を振り払った。

［とびお］

「ごめんな。依子が伸び悩んでるのは知ってるけど、

そんなことするような奴じゃないって思ってる。」

［とびお］

「それに性格だって、

まっすぐだけどちょっと不器用なだけなんだ。

それに、誰よりも努力する才能を持っている」

［とびお］

「つまづいても夢に向かって

上へ登ろうとしている人が、俺は好きなんだ。

誰かと比べて引きずり落とそうとする人じゃない」

［とびお］

「だから、ごめん。

アンタとは、お付き合いできない」

［後輩アイドル］

「なっ……なっ……」

［後輩アイドル］

「なによ、なによ！

人が下手に出てあげたのに、勘違いしないでよ！」

［後輩アイドル］

「ふーん、そうなんだ。私にそういう態度取るんだー。

あーあ、ふーん。かわいそーに。

終わりね。お前ら、終わったわ」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

その子は顔を真っ赤にしながら俺を睨むと、

グチグチ怒りの言葉を吐き捨てながら、去っていった。

そして数日後。

俺と依子の関係を大々的に取り上げた週刊誌が売り出された。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//4話終了